The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	George Eliot と Heroine の「放浪」 : Hetty の場合を中心に
Author(s)	冨田, 成子
Citation	Osaka Literary Review. 1994, 33, p. 89-102
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25502
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

George Eliot と Heroine の「放浪」
— Hetty の場合を中心に —

冨田 成子

I

「いつも同じ素材を磨りつぶし、同じような織物を紡ぐ機械」[1] になりたくない、と宣言した George Eliot は、新作に望む度に新たな領域の開拓に挑戦しているが、その一方で、非常に似通った主題と表現を執拗に繰り返す傾向も顕著である。例えば、ほぼ全作品が主人公の *Bildung* を主題とすること、Eliot の分身を思わせる同一タイプの heroine が度々登場すること等は、誰しも気付く共通項だろう。こういう Eliot お気に入りの類似表現の中でも私にとってとりわけ興味深いのは、殆どの作品に必ず現われる「若き女の放浪」の episode である。

Middlemarch を除く全作品に於いて、heroine、或いは heroine に準じる女性（大抵の場合、heroine の母親）が、男女の愛の葛藤の末、出奔し、水、或いは雪の中を彷徨するという挿話が dramatic に展開する。これらの episode は概ね紙枚にすれば僅かで、作品全体に占める量的割合はささやかだが、story 展開上為す役割はきわめて大きい。更に episode 自体衝撃的で印象が強烈なため、読者にとっては忘れられない部分となっている。

平凡な人物と平凡な背景より成る Eliot 特有の精細な realism の世界に突如割り込んでくる「若き女の放浪」という非日常的で現実味の希薄な挿話は、作品の他の部分とあまりにもかけ離れた雰囲気を放っており、その違和感には誰しも戸惑いを禁じ得ないだろう。しかもこの傾向は作を追う毎に強まり、後期作品に於ける「放浪」の episode は、romance 色の濃い melodramatic なものへと変化していく。Eliot 通例の世界とはかなり異質の表

現がこのように頻繁に繰り返される背後には、並々ならぬ執着と関心が感じられる。当論では Hetty の場合を中心に、「heroine の 放浪」に託した Eliot の意図を見ていきたい。

II

先ず主要作品に頻繁に繰り返される「放浪」の基本的な pattern を概観する。Tina (*'Mr Gilfil's Love Story'*)、Janet (*'Janet's Repentance'*)、Hetty (*Adam Bede*)、Maggie (*The Mill on the Floss*)、Molly (*Silas Marner*)、Romola (*Romola*)、Annette (*Felix Holt, the Radical*)、Mirah (*Daniel Deronda*) といった heroine、或いは heroine の母親である若い女性が、夫、或いは恋人との葛藤に苦しんだ末、家を出て放浪の旅に出る。勿論、当然のことながら放浪の様相は作品によって千差万別であり、夫婦喧嘩の果てに夜の寒空をさまよう Janet、或いは恋人と船遊びの際、自己の意志とは関わりなく潮流に流されてしまう Maggie のように、放浪と呼ぶには時間的に短いものもあるが、基本的に愛の苦悩を背負っての彷徨という点で、同一 episode に属するものと見做したい。放浪の途中、疲労と不安に苦しみ、死に瀕した heroine たちは、水、または雪の洗礼を受けることによって再生する。即ち、水に身を委ねる者 (Hetty、Maggie、Romola、Mirah) と、雪の中で死に遭遇する者 (Molly、Annette) に二別されるが、その結果、いずれの場合も苦悩から浄化され新生を得る。このように、大まかに要約すると、若い女の放浪とその後の再生、という pattern が Eliot の作品に極めて頻繁に繰り返されている。その執拗さはいささか度を過ぎた感があるのだが、この傾向は Eliot のみに見られる特有な現象だろうか。

放浪・旅への憧憬は、日常の倦怠からの解放を夢見る人間本来の本能であり、放浪の主題自体は古来より popular なものとして文学を飾ってきた。しかし洋の東西を問わず、放浪の主体は圧倒的に男性が占めており、種々の hero たちが織り成す放浪の在り方も、Picaresque Novel に於ける痛快な

旅、*Bildungsroman* の魂の遍歴、放浪者 Melmoth のような Gothic の旅、*Pilgrim's Progress* のような allegorical な宗教色の濃いもの、*The Grapes of the Wrath* の社会性の強い放浪等、多岐にわたり variety 豊かな世界を繰り広げている。

これに対して放浪の主体が女性の場合、作品は悲惨一色に塗りつぶされ、孤独と貧困を close up するのが大半である。とりわけ Victoria 朝小説にはこの系譜のものが多く、思いつくままに列挙しても、*Oliver Twist* (1836)、*Jane Eyre* (1847)、*David Copperfield* (1849-50)、*Ruth* (1853)、*Far From the Madding Crowd* (1874)、*Tess of the D'Urbervilles* (1891) 等、多数に及ぶ。注目すべきは、身分違いの恋の果てに放浪へと追い込まれる pattern が多い点であろう。即ち、貧しい娘が良家の息子、或いは雇い主と束の間恋に陥るが、当然の結果として破局を迎える。社会規範を破った娘には厳しい制裁が待っており、community から出て行かざるを得ないという process を扱った悲劇が多出している。こういった上流社会の男による階級の低い娘の誘惑→共同体からの追放→放浪の theme が多くみられるのは、それが当時日常茶飯事だったからだろう。私生児の増加は時代の抱える深刻な問題であり、特に、Hungry Forties と称される1840代の大不況の影響を受け、誘惑→見捨て→堕落の主題を追求する作品が1850年代に続出した[2)]と言われる。

Eliot の描く放浪する heroine の中で転落の case を辿るのは Hetty だけだが、転落こそ免れるものの、上記のような階級や父系社会の犠牲となる女の悲劇に該当する者は少なくない。例えば、Molly は地主の息子、Godfrey と秘密結婚の挙げ句、見捨てられ死に到るし、Janet を救った篤実な牧師の Trian ですら、結婚の意志もないのに身分の低い娘を誘惑した結果、堕落へと追いやった過去をもっている。また、貴族に売りとばそうとする実の父親の魔手から逃れて異郷を彷徨する Mirah 等、Eliot の作品にもこの類の女性の受難を取り上げたものが結構多い。このように Victoria 朝小説に popular な主題を素材としているが、例えば Gaskell 夫人が

Ruth によって転落の女性の悲劇を訴えて世の同情を喚起しようとしたような目的意識は Eliot には希薄であり、当時のこの路線に沿う小説とは一風異なる趣を見せている。

Eliot の描いた数々の放浪の中でも Hetty の episode は、最も多くの紙枚を割いて悲惨の極限をさまよう彼女の行動と心理を迫真的に辿った力作として、発表当初より高く評価されてきた。この Hetty の放浪を、やはり heroine の「身分違いの恋の果ての放浪」を扱った *Jane Eyre* と *Tess of the D'Urbervilles*（以下 *Tess* と略記）の同種の部分と比較し、この主題に対する其々の作家の姿勢の相違を検討することによって、Eliot の特性を浮かび上がらせてみたい。

先ず、*Jane Eyre* の場合。当時の女性にとって唯一の自活の道である governess として雇われた Jane は、雇い主の Rochester と愛し合うようになり、身分の差を越えての結婚を決意するが、彼が既に妻帯者であることを結婚式の当日知ると、懇願する彼を振り切って彷徨の逃避行に出る。当時の上・中流階級は性道徳が乱れ、重婚・不貞行為の乱脈ぶりは目を覆うものがあったと言われる。妻帯の真相が露呈した後も尚、Jane に同棲を迫る Rochester からも男性社会の身勝手な在り方が如実に窺われる。

> "Do you think I am an automaton — a machine without feelings? and can bear to have my morsel of bread snatched from my lips, and my drop of living water dashed from my cup? Do you think, because I am a poor, obscure, plain, and little, I am soulless and heartless? You think wrong? — I have as much soul as you,— and full as much heart! .... I am a free human being with an independent will; ....（*Jane Eyre*, 23 章）

圧倒されそうな厳しい剣幕での feminism の宣言である。このような女性の尊厳の主張が、一人称形式で語り継ぐ Jane の口を通して全編至る所で発せられる。governess の劣悪な雇用条件、夫が妻を屋根裏部屋に監禁することさえ合法的に認められていた程の男女権限の格差。Jane を取り巻く

のは、絶大な威力で支配する父系社会である。その中で彼女は既成の秩序と男性の専横を徹底的に糾弾し、反骨精神を燃やして攻撃する。Rochester に断ち切り難い情熱を抱きつつ、敢然と彼を捨てたのは、Jane を律する良心であり、彼を拒否して Thornfield を飛び出す放浪は、個人的な都合で節義を安易に侵す男性原理への激しい抗議に他ならない。

次に *Tess* の場合。Angel と別れた後、Tess は自活の道を選び、臨時雇いとしてあちこちの農場を渡り歩く生活に入る。苛酷な労働とうち続く悲惨な体験の中で読者の涙を誘うのは、働き口を探して放浪する41章の episode であろう。

農場を求めてさまよう日暮れ時、一人の男に付きまとわれた Tess は、造林地の落葉の山に身を隠し一夜を明かす。こうして難を逃れたものの、あまりの惨めさに生きる気力も失せて、「全て空なり」と呟く Tess が翌朝目にしたのは、美しい羽を血に染めた多くの雉の惨状だった。

> With the impulse of a soul who could feel for kindred sufferers so much as for herself. Tess's first thought was to put the still living birds out of their torture, and to this end with her own hands she broke the necks of as many as she could find, ...
>
> "Poor darlings — to suppose myself the most miserable being on earth in the sight o' such misery as yours!" she exclaimed, her tears running down as she killed the birds tenderly. "And not a twinge of bodily pain about me! I be not mangled, and I be not bleeding, and I have two hands to feed and clothe me."
>
> (*Tess*, 41章)

狩猟隊に撃たれて苦しむ瀕死の雉に寄せる Tess の心情は、強者の狼藉に打ちのめされる無力な被害者としての連帯感に他ならない。為すすべもなく苦しむ雉の姿を、身勝手な男たちに翻弄される我が身と重ね合わせたのである。普段は温厚なのに、狩猟期になるととたんに残忍になり、弱い生物の命を奪う人間の暴力を述べる語り手は、通常は人並みに良識や愛を持ち合わせ

ながら、ある瞬間酷薄に豹変する Angel の非情を仄めかしてもいる。Tess の悲劇は、Angel と Alec の egotism、生家の貧困と両親の無知、度重なる不運な偶然、等の為すところが大きい。Tess は Jane より更に無力な存在で、社会や強者に反抗する意志も力もなく、ひたすら逃避するか、或いは諦めに撤して弱者同志慰め合うしか救いがない。そしてこの episode には、蹂躙される美しい弱者への Hardy の切実な同情が感情的なまでに溢れている。

このように Jane と Tess の放浪では、当時の社会を投影した因習・階級・貧困による女性の受難が前面に強く打ち出されている。愛し合う男女の間にも歴然たる力の格差があり、*Jane Eyre* では無力な女の捨身の反抗が、*Tess* では無力な女への同情が、作者の激しい感情移入のもとに行間に滲み出ている。一方、Hetty の放浪にはこのような Victoria 風の feminism の影や感傷性は希薄である。

作品の場を借りて時代の抱える問題を声高に提起したり抗議することは Eliot の場合、非常に稀である。又、私生活においても、女性の窮状を訴えて向上を求める女権運動に関わりをもたなかった。ところで、G.H. Lewes との非合法結婚により Eliot が厳しい社会的制裁を受けたに反し、男性である Lewes には世間は寛容で、彼は早々に社会復帰を遂げている。このように Eliot 自身、女ゆえの迫害を身をもって体験している事実を考慮すれば、彼女が折から高まりつつあった feminism に傾倒したととしても不思議はないだろう。しかも既婚女性財産法案の改正運動、*English Woman's Journal* の創刊等に力を注ぎ、当時の feminist たちの leader 的存在であった Barbara Bodichon は、Romola の model とする程敬愛した親友だったし、かって Eliot が副編集長を勤めた *Westminster Review* には feminism 関係の essay が多々掲載されており、Eliot の周辺には feminism が渦巻いていた筈である。しかし、現実には彼女は feminism に対して極めて恬淡としていた。その理由として、Lewes との生活が愛と信頼に基づく幸せなものであったこと、作家としての成功と豊かな収入による充足感[3] が挙げ

られているが、何よりも大きな原因は彼女の特質である保守性ではないだろうか？　やみくもな改革、権利の拡張は危険だと彼女は考えていた。既成の秩序との妥協点を見いだし、調和のもとで改良を進めることが彼女の基本的な姿勢だったのである。Eliot の描く女性たちは時代の因習を越えた aspiration を抱くが、社会に反逆したり社会から逸脱する者はいないし、女ゆえの handicap に泣く者も少ない。Eliot の第一の関心は時代や男性の抑圧による女性の受難という領域ではなく、heroine の放浪にかけた主たる力点は他にあったと考えるべきだろう。

III

Hetty の放浪は 'The Journey in Hope'（36章）と、'The Journey in Dispair'（37章）の２つの章より成る。Arthur を追って Windsor まで辿り着く放浪の往路（36章）では、金銭の欠如、肉体の疲労といった旅の物理的な苦労が語られるが、死に場所を求めて原野をさまよい、遂に嬰児遺棄殺人に至る放浪の後半部（37章）では、屈辱と絶望に喘ぐ逃亡者としての心理的苦悩に spotlight が当てられる。特に落ちぶれた身を曝したくないという恥の意識から徹底的に人目を避け、極限の悲惨へと突き進む37章での Hetty の孤独地獄は、19世紀文学では他に類を見ないのではないだろうか。

この凄まじい荒廃の process を、語り手は Bible の tone にも似た簡潔・明快な語り口で淡々と述べ続ける。旅先での人々や動物との出会い、慣れない異郷での初めての体験に頭を打ち呻吟する Hetty の心理や反応が丹念に辿られるが、語り手は彼女から努めて距離を置き、冷静に観察する態度を極力崩さない。旅の二日目、Hetty は予期せぬ雨に見舞われる。

> As she was looking at the milestone, she felt some drops falling on her face — it was beginning to rain. Here was a new trouble which had not entered into her sad thoughts before; and quite weighted down by this sudden addition to her burden, she

sat down on the step of a stile and began to sob hysterically. The beginning of hardship is like the first taste of bitter food — it seems for a moment unbearble; yet, if there is nothing else to satisfy our hunger, we take another bite and find it possible to go on. When Hetty recovered from her burst of weeping, she rallied her fainting courage.　(*Adam Bede*, 36章)

勿論語り手の口調の底流には Hetty への哀れみの情が潜んでいる。しかし、一般論へ の敷衍によって Hetty への過度な同情にのめり込むのを避け、客観的な観察者・解説 者の立場を守っている。ここには *Jene Eyre* や *Tess* の語り手が、heroine に見せた 激しい感情移入は殆ど無い。唯一の例外は、放浪の episode を締め括る37章の最後で語り手が思わず吐露する惨めな Hetty への痛切な思いだが、それとて男性や社会への恨みや攻撃的な調子は皆無であり、圧倒的に強いのは悲劇の主因である Hetty の無知と狭く貧しい魂を見据えた容赦なく厳正な姿勢である。更に最終的には読者まで巻き込んで、行為の過誤が悲惨な結末を生むという因果応報の悪しき見本として Hetty を突放している。ここには社会改革の訴えはなく、道徳的教訓の匂いが濃い。

Poor wandering Hetty, with the rounded childish face, and the hard unloving despairing soul looking out of it — with the narrow heart and narrow thoughts, no room in them for any sorrows but her own, and tasting that sorrow with the more intense bitterness!....

What will be the end? — the end of her objectless wandering, apart from all love, caring for human beings only through her pride, clinging to life only as the hunted wounded brute clings to it?

God preserve you and me from being the beginners of such misery!　(*Adam Bede*, 37章)

Eliot には Hetty を環境や父系社会の犠牲者とする姿勢は弱く、悲劇に到ったのは彼女自身に非があったからだと考える。悲劇の舞台となる Hayslope 村は精細な realism で描かれるが、Eliot が少女期を過ごした Nuneaton が色濃く投影されて nostalgia が働いた結果、sympathetic realism によって美化された一種の楽園と化している。1799年に始まり1801年に幕を閉ざす *Adam Bede* の世界は、執筆当時より約60年前という時代設定によって古き良き時代として理想化を免れていない。平和で豊穣の Hayslope でも最も裕福で堅実な Poyser 家の一員として、また生来の美貌によって、Hetty は誰からも一目置かれる存在である。孤児とはいえ愛情深い叔父と口喧しいが寛大な叔母のもとで結構自由に暮らしている。当時父親の権限は絶対で、その専横ぶりを主題とする作品が多々ある中で、父の拘束から開放されている点でも、Hetty は異例である。このように恵まれた自由を Hetty に設定したのは、Eliot の関心が時代を反映する女の悲劇ではなく、もっと普遍的な倫理的存在としての人間の生き方にあったからだろう。生来の虚栄心から Arthur に幻惑され、彼に去られると愛情もないのに Adam と婚約する Hetty の衝動的な身勝手さを語る narrator の口調には、いつにない批判・皮肉・苛立ちの色が濃く、悲惨な結末を社会的悲劇としてではなく、個人の問題として還元しようとする姿勢が強い。この傾向が Hetty 以外の heroine の場合、更に徹底される。父親からの解放に加え、経済的にも恵まれた Dorothea を筆頭に、弱さと従順を女の徳目とする時代にあって、Eliot の heroine たちには自己の意志を実現出来る自由な境遇に恵まれた者が多い。こうして、彼女たちが男性とほぼ互角の力関係にあるため、Eliot の描く男女の葛藤劇が特定の時空における性差によるものではなく、自我を抱えた人間一般が背負う他者との闘争、という普遍性を帯びるのは必然であろう。

IV

Eliot の描く放浪は社会的悲劇としてよりも、自と他の軋轢に苦悩する heroine の精神成長の通過点として重要な意味を担っている。放浪は community からの逃避に終らず、常にもっと前向きの発展へと通じている点に注目したい。即ち、放浪は heroine が自我の閉塞から脱し広大な精神に目覚めるという開眼の契機となるだけでなく、必ず再生に結びついている。この点が1850年代に多く見られた身分違いの恋→放浪→転落という下降の process を描く作品群との決定的な相違点であろう。放浪と開眼の直結は章の title からも歴然で、例えば Maggie の場合には、'Borne Along by the Tide' (6巻13章) と'Waking' (14章)、Romola の場合には、'Drifting Away' (61章) と 'Romola's Waking' (68章) のように、放浪と開眼は一つの set となっている。

community を離れ外界へ飛び出した heroine たちは、先ず世間の広大さに驚き、同時に自己の卑小を思い知る。Hetty も旅の一日目にして既に、'Oh、what a large world it was!' と肌で実感するが、彼女の悟りは更に進み、今まで侮っていた Hayslope の生活が如何に幸せで誇らしいものだったか、又、あれ程熱烈な Arthur との恋も何とはかない悪夢にすぎなかったかに気付く。lady になる夢が完全に崩れ去ったばかりか、Hayslope での恵まれた立場も今は無くなり、たとえ Arthur に会えても日陰の身に甘んじる以外に道の無い屈辱の将来を、Hetty は直観的に洞察する。無知で未熟な17才の乙女に、旅の試練はたった一日にして何と多くのことを教えたことだろう。こうして Hetty は放浪によって一人よがりの狭い vision を脱し、自己の実態、自己を取り巻く人間関係、そして将来の展望さえも見事なまでに正しく客観的に把握し得ている。

旅による Hetty のもう一つの変化は、動物に寄せる感受性の芽生えだろう。子供や動物を毛嫌いしていた彼女だが、怯えたように震える spaniel 犬に強烈ないとおしさを覚える。御者の好意で荷馬車に便乗させてもらった

Hetty は、やはり道に迷ったところを拾われた子犬に、同類としての連帯感を抱いたのだ。こうして Hetty は、放浪によって vision の拡大、他者への連帯感に目覚めている。

ところで、放浪により開眼した heroine たちは、一様に再生を遂げる。再生の在り方には 二種類あり、Hetty、Maggie、Romola、Mirah は水の洗礼により浄化され、愛の思想に到る。Molly、Annette は雪の中の放浪の果てに自らは死ぬが、その生まれ代わりとして其々の娘、Eppie、Esther が新生し、以後 story の中心人物として活躍する。しかし、伝説の Madonna として称揚される Romola を頂点に、他の heroine たちには広大で明るい世界が開かれるに反し、Hetty は開眼を経て、Dinah の愛の力で頑なな非情を捨て魂が浄化されたにもかかわらず、罪人の烙印は消えず、海外流刑という厳しい扱いを受けている。Hetty だけがこのような苛酷な結末を課せられたのは何故だろうか。

Romola が漂流する地中海、Mirah が投身をはかる Thames 川は静穏で喩えようもなく美しく、金色の夕日の中を彼女たちは従容として水に身を託すのだが、Hetty は不気味な底知れぬ恐怖を湛えた池を前に死に切れず、生と死の狭間で懊悩する。Hetty の置かれた situation 自体は異常な極限だが、激しく揺れ動く彼女の心理は後期作品にも遜色のない精細な realism で生々しく辿られ、迫力ある臨場感を醸し出している。身元を隠すために basket を沈める石まで探したというのに、いざとなると生への執着は強く、パンをむさぼり眠りへと落ちていく。そして目覚めた時の闇、寒さ、孤独の恐怖に panic 状態になり、命からがら死の淵から逃れる様子は、残酷なまでに不様である。

構想当初から再生部の倫理的主題に romance の叙法を意図していた *Romola* は言うまでもなく、殆どの作品が放浪・再生部になると romance 色が濃くなる。放浪の episode に差し掛ると急激に話の流れが speedy になり、それ迄のきめ細かな筆致が崩れ、心理や社会の詳細な realism も思想や哲学の言及も姿を消して、現実味の希薄な plot だけが展開する。愛の

思想の完全な成就は日常の context では至難であり、非現実の romance の中でしか全うされぬことを Eliot は察知していたのだろう。それ故 realism で固められた Hetty の惨めな放浪に、Romola の絵に描いたような見事な再生が実現する筈がない。しかし、羊小屋に逃げ込んだ Hetty が暖かい羊の息吹に触れて、まだ生きていることを歓喜し hysteric にすすり泣く scene には、読者の共感をかき立てる力強さが溢れている。生と死、悲惨と歓喜に揺れ、矛盾と醜態をむき出しにした Hetty の偽らざる生身の姿は、美しいが血の通わぬ Romola の再生部よりはるかに感動的である。

V

Eliot は放浪の episode を何故このように執拗に書き続けたのだろうか。理由は彼女が常に創作の主題とした *Bildung* にとって、放浪が必須の要素だったからである。先述したように、Eliot の作品では、放浪が開眼の契機となっている。自らも旅が好きで創作の合間を見ては国内はもとより欧州各国を頻繁に訪れている彼女は、旅のもたらす独特の効果を身をもって体験していたのではないだろうか。

旅は人を日常から一挙に非日常空間へと連れ出し、無限なるものに直接触れさせてくれる。旅の高揚感で鋭敏になった感性は、外界の広大無限に接した時、省みて我が身の有限と小ささを痛感せずにはいられない。広大な世界と卑小な我が身の contrast を自分の目で実感するという situation こそ、唯我独尊の境地を脱し、人間は単独では存在し得ず、社会という大きな有機的組織体の一部であることを認識するには格好の状況であろう。

heroine たちが自我の閉塞から *Bildung* の末に辿り着いた境地を、Eliot はしばしば 'larger life' と称しているが、旅が喚起する広大な perspective こそ、この 'larger life' の表現に大層効果的な objective correllative であると重視したのではないだろうか。

ところで、*Middlemarch* のみ放浪の要素が無いと先述した。およそ人生

のあらゆる事象を網羅した *Middlemarch* に放浪が扱われていないのは不思議な気もするが、Eliot はちゃんと Dorothea に自宅に居ながら放浪の疑似体験をさせている。80章のあの印象的な窓辺の開眼の scene に於いて、広大な外界と小さな自己という旅が呼び覚ます対照の situation を応用している。

愛する Ladislaw が Rosamond と親しく同席しているのを目撃した Dorothea は、嫉妬と憤りで一夜悩み抜いたあげく、束の間のまどろみに落ちる。早朝、目覚めた彼女は悲しみの消えぬままカーテンを開け、窓外に目を向ける。

> She opened her curtains, and looked out towards the bit of road that lay in view, with fields beyond, outside the entrance-gates. On the road there was a man with a bundle on his back and a woman carrying her baby: in the field she could see figures moving — perhaps the shepherd with his dog. Far off in the bending sky was the pearly light; and she felt the largeness of the world and manifold wakings of men to labour and endurance. She was a part of that involuntary, palpitating life and could neither look out on it from her luxurious shelter as a mere spectator, nor hid her eyes in selfish complaining. (*Middlemarch*, 80章)

目の前に拡がる広大な外界に触れたとたん Dorothea は、狭い自我に懊悩することの愚かしさを悟る。やっと夜が明けそめた早朝から労働に勤しむ羊飼いと男女の姿に、仕事と家族という重荷を背負って営々と生きる人間の宿命的な苦悩を知る。彼女の到達した境地は自我を越えた広大な世界であり、今までの自己中心的な独善性を脱し、人類の一員として謙虚な vision を得ている。こうして我が家の窓から臨む外界という設定によって、Eliot は巧みに放浪体験と同じ開眼効果を Dorothea に与えている。

以上見てきたように、Eliot は時代の popular な theme である「女の放浪」を素材としたが、試練を経て開眼するという *Bildungsroman* の中にそ

の theme を組み込んで独自の展開を見せ、いわば時代を俎上としながら時代を越えた普遍の drama を作り上げている 。人間を単独では生きられない社会的存在だと考える Eliot にとって、問題は自我を抱えた人と人との軋轢であり、その結果の孤独と疎外だった。自と他を結ぶものを生涯追求した Eliot は、他者との軋轢を通して自己の歪みに気づき、寛い精神と客観的な洞察に到る形成の歩みを常に創作の主題として追求している。その歩みの中で放浪は狭い自我からの突破口として、開眼・再生へと誘導する重大な契機であり、生々しい realism で辿られる自我の世界と再生部の romance 的世界との gap を埋める橋渡しの役割を果たしているように思われる。

放浪という非日常空間を設定し、romance への導入部とすることによって、Eliot は heroine たちの再生のより自然な成就を計ったのではないだろうか。

註

1) Gordon S. Haight (ed.), *The George Eliot Letters*, 9 *vols.*, New Haven, Yale University Press, 1954－78, IV, 49.
2) 松村昌家「ヴィクトリア朝の文学と絵画」(世界思想社、1993) pp. 86—87.
3) Jenni Calder, *Women and Marriage in Victorian Fiction*, (Thames and Hudson, 1976) p. 126.

本稿は第46回日本英文学会中国四国支部大会でのシンポジウムにて発表したものである。